



シリーズ「アジアほっつき歩る記」第26回

ミャンマー ヤンゴン最新事情

須賀 努

コラムニスト・アジアウオッチャー

ここ2年ほど、日本政府の支援もあり、日本企業の視察・進出が盛んに報道されている国ミャンマー。今回は最大都市ヤンゴンの最新の変化について、簡単にお伝えし、その近況をフォローアップしたい。

きれいな中古車走る

ヤンゴンの空港を出ると、一面に企業広告の看板が目に入った。昔からあるにはあったが、急速にコマースが普及している様子が見て取れる。日本企業もあるが、韓国企業、欧米企業も目立っている。ヤンゴンが消費地としても注目されている表れであろう。

市内へ行く道ではここ2年で激増した車によりしばしば渋滞が起こっている。その車を眺めているとタクシーの急増が目についた。以前は白タクまがいのよくわからない車と料金交渉をしていたが、今ではタクシーの表示がなされており、外国人でも見つけやすくなっていた。ただメーターが付いていても料金は交渉という習慣に大きく変わらなかった。ハードは変わってもソフトは追いついていない例だろう。

また走っている車がかなりきれいに見えた。以前は本当にボロボロのカローラなどが主流だったように思うが、今では新車と見まがう『きれいな中古車』が街に溢れている。理由を尋ねると『車は基本的に輸入だが、新車を輸入すると関税が高いため、新車に近い中古車の輸入が流行している』とのこと。税金だけで2万米ドル（約200万円）などという話もあり、一体誰がそんな高額を支払えるのかと訝

るが、現実には車は急増している。『ヤンゴンには金持ちと貧乏人しかない』と言われた言葉を思い出す。

高騰する不動産

ヤンゴン市内の不動産価格の高騰も顕著となっていた。あるミャンマーの知り合いは結婚の為に3年前に新居となるマンションを購入していたが、昨年ようやく完成してみると価格が4倍にもなっており、驚いたという。『今やヤンゴン市内は高過ぎる。ある種のバブル状態であり、マンションを売却し、その資金で有力な地方都市で不動産を買った方が、より確実な投資になる』と言い、現在タイ国境沿いの街の不動産を物色中だと語る。

ヤンゴン市内の賃貸住宅も高騰。2年契約を更新しようとしたある日本人は『大家が提示した額が現在の3倍だった。とても払える額ではないので、引越しを検討中』だという。特に日本人が多く流入したここ2年は、家賃上昇が甚だしい。外国人の居住に適する物件が少ないため、貸し手の言い値になっている。

日本企業の駐在員は一人一物件だが、中国人や韓国人駐在員は一つの物件を3人でシェアすることもあり、彼らが賃料を押し上げている、との話も聞いた。確かにルームシェアは割安ではある。ホテルはどんどん出来ており、以前はオフィスや病院だった場所がホテルに衣替えしているが、それでも需要に追いつかない。

因みに日本企業が基礎工事を始めたヤンゴン郊外のティラワ工業団地付近も、発展を当て込んで相当



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



に不動産が値上がりしている。

市場としてのミャンマー

『金持ちと貧乏人しかいない』と言われるミャンマー、民政への移行後、金持ちの数は増えているように思われる。前述の不動産の値上がりによる成金の発生、海外とのビジネスチャンスをつかんだ者の成功など、従来以上にその幅が広がっている。

その富裕層をめぐって、ヤンゴン市内には多数のショッピングモールが作られ、既に飽和状態ではないかと思われるほど。また日本食だけでも80軒はありと言われ、外食産業の競争も激しくなっている。家賃高騰などの兼ね合いもあり、今後は淘汰が進むとの観測も見られた。

今回滞在中にJETRO主催のジャパンフェスティバルが開かれており、日本のトップ企業など200社が出展、会場には大勢のミャンマー人が詰めかけ、大賑わいだった。自動車以外でも家電、食品、日用品など幅広い分野で



写真1 ジャパンフェスティバルの企業ブース

日本製品に関する需要が感じられ、ヤンゴンに関してだけ言えば、日本企業の市場として視野に入ってきたと言えそうだ。

成功した者がすることは

ご承知の通り、ミャンマーは世界有数の仏教国、それも上座部仏教を篤く信仰している人が多く、自らの行いもこの規範の中で律せられている部分がある。最近の急速な経済発展は人々の宗教観にどのよ

うな影響を与えたのだろうか。

以前はヤンゴンに来ると筆者を必ずお寺に連れて行き、そこでゆっくりと語らったミャンマー



写真2 ヤンゴンのお寺で出された美味しいごはん

人、今では彼らは携帯電話を持ち歩き、忙しそうに駆け回り、お寺へ行く回数もめっきり減っているという。だが功成り名をあげたミャンマー人の中には、来世へ向かって『徳を積む』という行為にかなりの財をつぎ込む人々もいる。自らの来世は自らの徳によってしか開かれぬという考えだ。

今回訪れたある寺では、毎日信者にご飯を無料で振る舞っていた。しかもこのご飯がおいしい。従来お寺のご飯と言え、『生きるに足る食事』だったのだが、ここにも変化が出てきていた。自らはフルーツしか食べないという住職は『食事は美味しい方がよい』と頓着しない。

そればかりかこの寺では毎月大勢の信者をミャンマー各地に派遣し、10万人単位の庶民に施しの食事を提供している。その財源はどこから来るのか。住職の周囲には沢山の富裕層がにこにこしながら座っていた。中国や日本のように単に金持ちになり、カネの使い方に困ってしまう人々とは一線を画しているようにも思える。

ここ数年のヤンゴンの急速な発展ぶり、進出を考えている日本企業はそこに惑わされることなく、ミャンマー人の仏教観などをしっかり認識し、少し長い目でこの市場を見ていくとよいのではないかと感じた。